

登録日本語教員養成機関・登録実践研修機関

自己点検・評価報告書

機関名： 清風情報工科学院 日本語教師養成講座

点検対象期間： 令和7年4月1日～令和8年3月31日

点検実施日： 令和8年4月2日

1 目的

本報告書は、登録日本語教員養成機関及び登録実践研修機関として実施する養成課程・実践研修について、教育内容、実施体制、成績評価、教壇実習、受講者支援、施設設備、情報公開等の状況を自己点検・評価し、教育の質の維持向上及び適正な業務運営を図ることを目的とする。

2 実施体制

自己点検・評価は、次の体制により実施した。

区分	氏名	職名
責任者	吉川 紀子	別科長
委員	土屋 理恵	副校長
委員	矢野 裕之	事務長
事務担当	漁士 由紀	事務担当

評価基準は次のとおりとする。

評価	内容
A	十分に適切
B	おおむね適切
C	一部改善を要する
D	改善を要する

3 自己点検・評価結果

点検項目	主な確認内容	評価	改善事項
教育課程	コアカリキュラムとの対応、シラバス、授業時間数、到達目標、科	B	コアカリキュラム対応マトリクスを継続活用し整合性確認を実施。座学・実践研修間で定期的な情報共有を行い科目横断的な連携を強化。課

	目間連携		程全体を通して参照枠の理念を授業実践に反映し、今後はその内容をシラバス上でより明示的に示すことを検討する。
教員・指導体制	教員資格、担当配置、責任者配置、教員間連携、研修等	B	副校長を中心とするカリキュラム検討会を継続実施。学内勉強会および学外研修への参加により資質向上を図る。また教員1名が大学院修士課程に在籍し研究・履修を通じて指導の高度化に取り組む。今後は研究成果や外部研修の知見を組織的に教育内容へ還元する仕組みを整備する。
成績評価・修了判定	評価基準、出席管理、課題・試験、修了判定、記録保存	B	評価基準のさらなる明確化と、受講生への透明性の高い評価情報の提供。
実践研修	研修内容、指導体制、教材、時間配分、研修記録	B	新たに「実践研修ガイド」を整備し実習前オリエンテーションや担当教員間の打ち合わせに活用。現在情報共有を学校全体・連携・担当者間の三段階に整理し組織的な質保証体制を構築しているが、今後は運用状況を検証しガイドの内容のさらなる充実を図る。
教壇実習	実習先確保、実習内容、指導・評価体制、実習協力者への配慮、実習記録	B	実習前に学科長が対象クラスを訪問し目的・内容・留意事項を説明する体制を整備。実習内容は通常教育課程との整合性を保ちながら精査・調整し、実習生の指導と実習協力者の学習効果の両立を図る。今後は多様な背景を持つ実習協力者への対応をさらに検討していく。
受講者支援	オリエンテーション、学習相談、苦情対応、個人情報保護、キャリア支援	A	修了生教員等による「トークタイム」および多様な現場の実践者による特別講義シリーズを今後も継続・拡充する。
施設・設備	教室、ICT設備、教材、衛生・安全管理	A	1人1台のPC設置によるICT環境および著作権に配慮した教材管理を継続する。
事務管理	受講申請、出欠、成績、修了証、帳簿・書類保存	B	重要書類における誤植・記載ミスの防止に向けた二重チェック体制の強化。

情報公開	課程情報、受講手続、費用、自己点検結果の公表	B	本自己点検結果をホームページ上で速やかに公表する。また、受講手続や費用に関する情報については、修了生や受講生からの意見・フィードバックを継続的に収集し、改善すべき点が明らかになった場合には適時対応できる体制を維持する。
------	------------------------	---	---

4 受講者アンケート等の状況

項目	結果・主な意見
授業内容	座学で学んだ理論や知識が、実習や他の授業科目での実践を通じて改めて腑に落ちるという経験が多く報告された。「授業を受けた時点ではイメージしにくかった内容が、実習を経ることで具体的に理解できた」「別の科目での学びが積み重なることで、以前学んだ内容の意味がより深く理解できた」といった声が寄せられており、各科目が有機的に連携した学習設計の効果が受講生の実感としても現れている。
教員の指導	非常勤を含む教員それぞれが、日本語学校・地域日本語教育・ビジネス日本語・キャリア支援など多様な現場での経験を持つことから、さまざまな立場の教員による指導を通じて日本語教育の幅広さを実感できたという意見が寄せられた。各教員の専門性や経験の多様さが授業に彩りを与えるとともに、指導の丁寧さや受講生一人ひとりへの気配りについても好意的な評価が多く、教員の人柄や姿勢が学習意欲の維持・向上に寄与している面もあったようである。
教材・資料	教科書のコピー配布における著作権の留意点説明など、適切な配慮がなされていることが評価された。
教壇実習	養成課程を通じて積み上げてきた理論と実践が結びつき、主体的に授業を組み立てる経験として実りあるものになったという評価が多く寄せられた。また、日本語科が併設されていることで、日常の通学の中で留学生や現職日本語教師の姿を自然に目にする機会があり、教壇実習での授業場面をより具体的にイメージしながら準備に臨めたという声も見られた。学習環境そのものが実習への心理的な準備を後押しする役割を果たしていたようである。
事務対応	受講に関する手続等に対して迅速かつ丁寧な対応がなされていたという評価が寄せられた。また、受講生が気づいた点や確認事項を事務窓口に伝えた際、教員間での情報共有が速やかに行われ、適切なフォローにつながったという意見も見られた。事務と教員が連携した対応体制が、円滑な受講生活を支える基盤となっていたと評価されている。

5 総合評価

令和7年度において、本機関は、登録日本語教員養成機関及び登録実践研修機関として、養成課程及び実践研修をおおむね適切に実施した。

教育課程・指導体制・実践研修のいずれの面においても、前年度までの取組を土台としながら、本年度は組織としての連携と質保証の仕組みをより意識的に整備・強化した一年であった。特に、座学と実践研修の科目横断的な連携、「実践研修ガイド」の整備、教員の継続的な研鑽など、個々の取組が有機的につながりつつある点は、本機関の教育の質向上において着実な前進と捉えている。

受講生アンケートにおいても、学びの深まりや教員への信頼に関する肯定的な評価が寄せられており、本機関が目指す教育の方向性が受講生の実感としても現れていることは、今後の取組への励みとなるものである。

一方で、評価基準の明確化、研修成果の組織的な還元、情報公開の迅速化など、引き続き改善に取り組むべき課題も明らかとなった。これらについては次年度の改善計画に位置付け、継続的な質の向上を図っていく。

6 改善計画

改善課題	改善内容	実施時期	担当
評価基準の明確化	評価表・項目の見直し	令和8年度 4月	吉川
教員の資質向上	学内外の研修会・勉強会への参加を継続し、得られた知見を教育内容に反映する	令和8年度 順次	土屋
書類管理	保存書類一覧表を作成する	令和8年度 順次	漁士
情報公開	本報告書をホームページで公表する	令和8年度 4月	矢野

7 公表方法

本報告書は、本機関のホームページ等により公表する。

8 確認

本報告書の内容について、自己点検・評価委員会において確認し、機関として承認した。

令和8年4月15日

機関名： 清風情報工科学院

代表者： 校長 平岡 憲人

自己点検・評価責任者： 別科長 吉川 紀子